

沖

1

昭和45年創刊 平成27年1月1日発行(毎月一回一日発行) 俳句雑誌 沖 第46巻第1号

俳句雑誌[46巻]



暗記の眼

能村 研三

丁寧に暮らす

「沖」創刊四十五周年の記念の年を迎えた。先師より主宰を継承して十五年目でもある。

昨秋より、四十五周年の記念事業についてはお知らせしている通りで、一部の企画については「沖」誌の通常号でも掲載が始まっている。

また一昨年より準備している「沖季語別俳句選集」も、編集作業がいよいよ大詰め段階である。

本年が四十五周年の記念の年であるので、一月号より表紙デザイン及び巻頭ページのレイアウトを一新した。表紙絵は市川美術会でお世話になっている、水墨画家の池田蘭径先生の「ヨーロッパの街を行く」のシリーズから「ザルツブルグ冠雪」を一月号から三か月を飾らせていただく。三か月ごとに表紙絵を替えて行く予定である。この絵は先生から市川市が寄贈を受け、市川市文化会館のロビーに二百号の大作が掲げられている。私も四、五年前にザルツ

飛驒の旅その朝に踏む朴落葉

坂綴り文士を綴り小菊晴

蔓たぐり烏瓜には行きつけず

水分に一瞬の瀬秋深み

後を引く怖い話に秋惜しむ

根気よく播粉木使ふ神の留守

少年の暗記の眼冬ぬくし

固結びこつこつ解く冬うらら

海鼠囁む忙中閑の好奇心

岬時雨碇泊船の灯の強し

ルグを訪ねた時に、この絵の描かれた場所を訪れたことがある。

四十五周年の記念事業は十月二十六日の祝賀会を頂点に各事業も盛り上げていきたいと思っている。

幸い私も公務の仕事が無くなったので、フルに俳句の時間として費やすことが出来るようになった。本年からは、従来は同人有志に一部お願いしていた地方支部の指導も私自身がお伺いしたいと思っている。

本年の抱負としては、忙しい中で仕事をこなす中、より丁寧な仕事をしていくよう心掛けていきたい。昨年亡くなった高倉健さんは人の気持に寄り添って、人のために丁寧生きられた人で、自分が触れる人に、自分が何が出来たかを考えて、身を粉に出来る人であった。

私など忙しさにかまけて、毎日を行き当たりばつたりの暮らしをしてきたように思う。常に何かに追いつかれて日々を過ごし、生活や人生に落ち着きがなかったように思う。俳句に向かう時も、少しの時間でも大切にしながら「丁寧に暮らす」という意識を持っていきたい。

蒼茫集

木 枯

森岡 正作

山家にも華やぎのあり富有柿
若返るため吹かれ行く枯野かな
寡黙なる男木枯連れて来る
薄紅葉朝は煙のやうに立つ
背負籠のきちかう鈴の鳴るごとし
働きに見合ふ二合の温め酒

全 開

辻美奈子

蒲の絮やはらかうして芯のあり
おでこ全開木枯を帰り来し
小春ころころ大樹寺の羅漢さま
花屋よく匂ふ勤勞感謝の日
詩に翼あり冬麗のセスナ発つ
鷹渡る羽生結弦は立ち上がる

ためらひ滝

秋葉雅治

筆順に似て高嶺よりもみづれる
凍てまへの滝のためらひ流れかな
二の酉の更けても励む居職の灯
柿たわわ天より垂るる朱の滴
ふくろふの目あき目ぐらの見分けやう
挫折にはやさしき故里にの楯あかり

水あかり

千田百里

紅葉且つ散る美しき言の葉選るやうに
人送り星明りまた水あかり
市川に梨あり梨の検見をらむ
指先に紙縊をどらせ神の留守
冬うらら人形焼の仏がほ
落葉舞ふそれもファッション街らしく



無垢 宮内とし子

散ることを知らで色濃き吾亦紅
月今宵無垢のこけしに目鼻つく
塔の影重ね小春の文士墓碑
糸菊の伸びる力に優秀賞
山ひとつ湖底に沈め紅葉づれり
初冠雪復興の地の底ぢから

武士 甲州千草

百舌猛る保険証書を読みをれば
落語家の掃除講釈十二月
武士の起きて来さうな紅葉山
身仕度の簡素同士や浮寝鳥
白鳥の蹲る田と羽ばたく田
牡丹焚闇ビロードに深めゆく

母校 安居正浩

久々の母校に冬の蛇口あり
ゆつくりと出でて花野の月となる
目配せは夫婦の絆雁渡る
水たつぷりと人形になる菊に
鰯雲おやぢ居るかと書肆覗く
名利を二つ訪ねて菊脛

波間歩き 久染康子

角伐られし鹿の韋駄天走りかな
凍を待つ瀧直線を保ちけり
穂すすきの波間歩きや富士裾野
風紋の縁の堅さや鮭風
木守柿鋼の帯に守らるる
裏木戸の萩に拒まる里帰り

深まれり 樋口英子

家ごとに良夜の翳を頷ち合ふ
秋燈を灯し戸ごとにある暮し
枯野はるか心の枯野なほはるか
式部の実色づき八十路深まれり
草に沈みて秋蝶のもう見えず
月揚げて無限大なる駿河湾

鍛冶の音 藤原照子

星月夜切羽詰まるといふ力
山霊の振り撒く日ざし木守柿
一湾の恍惚秋の入日かな
湖も嶺々も南部の霧襖
時雨過ぐ南部曲屋湯気立てり
しぐるるや南部鉄器の鍛冶の音

慥か 吉田政江

賜猛る慥か錠前閉めたはず
新走り下戸は言葉に酔ひにけり
曇る日を押し上げ十月桜かな
澄む秋の犬笛を待つ牧羊犬
一匹怠けゐて秋麗の羊ショー
ホルスタイン鳴き冬隣る南部富士

エレベーターで 田所節子

満月やエレベーターで着くわが家
木守柿ひとり棲ひの母卒寿
烏瓜詩情の発酵待ちてをり
神の掌に遊ばされゐて芋の露
いわし雲赤組白組入場す
新涼の炎を入れ仕上ぐバター焼

湾風 荒井千佐代

くんち果つ長崎港は藍深め
紅葉且つ散る湾風のカフェテラス
けふは今日のわたくしなりし一位の実
憂国忌煙出しより火の粉飛び
賜高音漬物樽の逆さ干し
飛魚北風や波止場に古りし塩倉庫

鳶の輪 広渡敬雄

秋風や古伊万里に藍濃きところ
鳶の輪や隣りあはせに早稲晚稲
秋茄子の影もむらさき籠の中
台風近づく芝の膨らみぬ
水澄んで小鳥の声の流れけり
鳥籠に布被せあり初しぐれ

煮干 林昭太郎

一時間鳴らぬ踏切草の花
美しき瓦斯の焰も雁の頃
風の無きときは陽にゆれ秋桜
既往症十を数えて水澄めり
グラタンの焦げ目が好きで冬が好き
まつすぐな煮干はなくて一茶の忌

冬の樹々 藤森すみれ

走り根の朽ちたる小径落葉積む
火種には多すぎし柿信濃晴
西望の線の太さよ冬の樹々
雪の来る前の静かさ裸婦の像
この紅葉に放つ胸の火いま欲しき
蓼科は本降り冬の第一章

旅どころ

成宮紀代子

複雑なビルの足場や十二月
取的の下駄音高く鵲日和
耳朶のさくら色なるマスクかな
タクシーの運転手の黙雪催
ご近所の夜ふかしの灯や冬ざる
煤逃げや駅中と言ふ旅どころ

牛のくに

望月晴美

花野へと一步踏み込む渡し板
ふるさとの香よ秋麗の牧草地
秋爽や柵を越えれば牛のくに
台風裡ただよふごとく帰宅せり
いま母の体温ならむ紅葉山
足場とれし変身わが家秋日燦

一位の実

楠原幹子

発心のその日吉日一位の実
獵期来る縄文人の血の潜み
海神の投網を天へ翳雲
笑はする才智もなくて林檎むく
綿菓子を持たされてゐる芋煮会
背の高い山より眠りはじめけり

天体ショー

内山照久

鳥渡る弓引き絞る九十九里
遙かなる思ひ出確か吾亦紅
星座の名得意に言ふ子湯ざめかな
夜ごと見る天体ショーや大根畑
言ひ足りぬこともあらうに焚火消ゆ
展げられ鶴が羽ばたく屏風かな

登高

杉本光祥

やみくもに歩き花野に溺れけり
石庭の影濃きところ虫すだく
萩揺るる喜寿の思はれにきびかな
初紅葉いま早池峰の裾明り
岩木嶺の空の深さよぶなもみぢ
登高す最後の一步大股に

冬に入る

高橋あさの

いちはやく夜の音とらへ白襖
川筋のひかりにふはと白鳥来
噴く山も寡黙の山も冬に入る
大櫓より冬に入る武蔵ぶり
初物とひと筆いぶりがつこかな
おほまかに枯萩くくり齡積む

潮鳴集

故郷 七種 年男

故郷は遠くの孤独胡桃割る
揺さぶれば風の離るる烏瓜
松手入鋏の音の降つてきし
干大根白に個性のありにけり
冬空へ五連水車の五音階

蠅取器 菊川俊朗

秋燈の照らす家族と言ふ時間
詩を作るには秋天の高すぎる
秋日濃し生家に残る蠅取器
銀杏散る凱歌聞こえてくるやうな
どうどうと波の逆巻く神の留守

第一声 福島茂

悟りたる色となりをり枯蟻螂
シベリアの話を今に冬帽子



文化の日上野へ行つてみることに
白鳥来第一声は天を向き
鈴木にひと日費やし漱石忌

覚悟の色 清水佑実子

みちのくや覚悟の色にもみいづる
死をもつて世代交代鮭遡上
鮭来たるかの震災の稚魚なるか
つはものへ北上川の時雨虹
次からつぎへ影絵のやうに雁の列

初冠雪の富士 今瀬一博

一刷けで書きたし初冠雪の富士
百名山一の低山粧へり
花野より薬草一本引き出す
ひとしきり名を楽しめり秋薔薇
雁渡し仕舞はんと鎌研いでをり

『持ち時間』

(自選二十句)

樋口英子

海 国 の 気 を ひ き 絞 り 弓 始
生 か さ れ て ゐ る 一 身 に 初 日 浴 ぶ
丹 頂 に 餌 を 撒 く 声 の 透 き と ほ る
放 た る る ま で の 目 隠 し 鷹 猛 る
野 焼 あ と 鎮 め の 雨 と な り に け り
生 き る と は 前 進 志 向 ば ら 芽 吹 く
ま だ 濡 れ て ゐ る 八 ヶ 岳 の 桃 の 花
好 き な こ と し て ゐ て 不 安 桜 桃 忌
日 本 の 子 供 が 好 き で 燕 来 る



白桃に刃を入れ夜をしたたらす
いま抜けしばかりか蟬の殻濡れて
あるがまま生きて晩年水澄めり
稲架襖月に眠りを深くせり
海が見え空港が見え大根干す
着ぶくれて減りゆく吾の持ち時間
紫蘇もんで骨の髄まで昭和なり
眠る山父情はかくも動かざる
噓して少しやはらぐかなしみよ
鴨翔つや一瞬空の暗くなり
中空は薄むらさきに冬夕焼

『多感』

(自選二十句)

秋葉雅治

洛中は散り洛外の花万朶
畳紙解けば時に耐へをり花衣
帰任なき赴任見送る春夕焼
さくら薬降る終章の弦高音
藤老ゆる時間の束の降るやうに
紫陽花の雨意のひとひら紅ふふむ
濃きは憂し淡きはすがし額の花
巴里祭より河童忌のあひ梅雨しとど
うすものの襞の陰影谷崎忌



発想の湧いては抜ける籠枕
ためらひも決断もありサングラス
海霧のぼる崖の垂直草田男忌
雲掴むやうに掬はれ新豆腐
冷まじや月を蝕む星に棲み
目測の精度高まり猟期来る
夢いくつ棄て熱爛にたどり着く
雪をんな滑る男に魅せられて
目礼にこたふ黙礼冬深し
貼り終へし障子や白は祝ぎの色
沸点に達して独楽の澄みにけり

『角巻』

(自選二十句)

小野寿子

滝行者まなこ窪みてもどりけり
生徒らのしめ縄飾るうさぎ小屋
海へ出て色失へり雪解川
雛の灯に雪のあかりの加はりぬ
仏相か女相か石のあたたかし
田植機を牛のごとくに撫でてをり
大向うに山風入りぬ夏芝居
かなしみの伝はり易き絹のきもの
打ち水の最後見えざるものに打つ



母が吹くまつりの後の祭笛
天の川眠れる蝶を地に濡らす
火加減で煮物しづまる敬老日
修験者らばりばり霧を割いて来し
岬馬の四肢抜けてゆく大吹雪
風雪に真向ふ馬の神々し
おもふことありて襟巻深々と
林檎櫓足してあそばすおしら様
音といふ音を束ねて滝凍てる
手つながねば吹雪亡者にさらはれさう
角巻をすつぽり冠り意地通す

年間十二句

神山節子

花野来て花に紛るる安堵かな
りんご剥くくるくる過去へ落ちてゆく
分け入つて芒の波に溺れけり
みかん載せ卓に置かるる成績表
冬うらら天孫降臨信じをり
南国の夢を見てゐる海鼠かな
刃物屋の暗がりになり立雛
耕人のしばらく風を見てゐたり
白牡丹静かに燃ゆる心あり
白薔薇嘘つくことの難しく
で虫もカフエの男も雨が好き
八月のかなしき雨に濡れてをり



沖作品



能村研三選

行く秋のひと日を遊ぶ文士村

千葉

岡 真紗子

身に入むや縄文人のネックレス

初茸の木の葉隠れを見逃さず

吉野山をゆつくり下る竜田姫

閑寂の庭にくれなゐ帰り花

秋空に声躍らせて法被の子

愛知

近藤 鉦子

樟大樹影際やかな十三夜

大藁屋薪高々と冬に入る

松手入庭師老いの背しやんと立て

ヤッホーと罫も染まる紅葉山

風は今絹の手触り野紺菊

打ち粉振る量も勢ひも走り蕎麦

白くなる頃合わすれ酔芙蓉

大数珠の木艶たゆたふ竹の春

秋冷や老枝化して「竜の杉」

新潟

三留 早苗

破蓮にそよぐ力のなかりけり

千葉

塩野谷慎吾

初鴨の短き水尾を引きにけり

転がつて団栗の知る濁世かな

蟪蛄のすがれ始めし眼かな

雨の音風の音にも秋惜しむ

秋上がり造り酒屋の海鼠壁

神奈川

小林 和世

天空に結界の橋秋惜しむ

鋸の刃を研いでゐる厄日かな

木曾谷の岩の尖りや水澄めり

風に乗り光に乗りて赤とんぼ

萩刈つて風ゆく道の広ごれり

秋思ふと飛行機雲の行方追ふ

市川市

本池美佐子

爽やか

に未知てふ扉開けにけり

菊人形朝の日差しをほしいまま

からからと鳴る絵馬あまた紅葉晴

沖作品 15句選評

*
能村研三

閑寂の庭にくれなぬ帰り花 岡 真紗子

閑寂な庭と言うと、紅葉の盛りを少し越えた冬の京都の庭が思い浮かぶ。先日私も久しぶりに京都を訪ね、大徳寺や仁和寺の冬の庭を拝見した。庭に色とりどりの花が咲き乱れるのもよいが、枯山水の枯淡の境地を静かに味わうのもよい。こうした庭園のほとんどが室町時代に発達した禅宗の影響を受け、水を一切使わない白砂や石組だけの簡素な庭園である。茶道の世界にも共通するもので、茶室を有するような庭は「わび・さび」の世界というか、もの静かでどことなく寂しげな境地、あるいは色彩感を否定したような枯淡な趣を、美意識として発展させたところに、日本文化の独自性があるのだろう。ここで詠まれた帰り花は「くれなぬ」の花であるから、桜や桃といった花ではなく、木瓜の花を想像した。花にとつては、花時でない時に花を咲かせるので渾身の色を絞り出してくれたのかも知れない。

い。

樟 大樹 影 際 や か な 十 三 夜 近藤 鉦子

今秋の十三夜は一七一年ぶりに二回見られたそうだが、後の月とも言い、昔は十五夜を見たら十三夜も見るとされてきたそう。十三夜は十五夜よりほぼ一月遅く寒くなってくるので、ものさびしげな句に詠まれることが多い。この頃は四囲も枯れはじめ、虫の音も途絶えがちになり、しかも大気は澄んできから、月光のみが鮮やかに光を放つ。

樟の木は「となりのトトロ」にも出てくる。高さが三十メートル近くの巨木となり、ご神木ともなる。十三夜に照らされた樟の大樹は際やかな影を映し出していた。

打ち粉 振る 量 も 勢 ひ も 走 り 蕎 麦 三 留 早 苗

打ち粉というのは、そばを打つときや切るときにめん棒やし台にくっつかないように振るそば粉のことで、べとつかないサラサラした粉であることが必要。私は蕎麦打ちの経験がないので、詳しいことは判らないが、いつか機会があったらやってみたい作業の一つである。新蕎麦の季節がやってきた。昔から蕎麦好きの人たちは、首を長くして待ったものだった。「量も勢ひも」という表現に蕎麦打ちのダイナミックな楽しさが描かれている。

破 蓮 に そ よ ぐ 力 の な か り け り 塩 野 谷 慎 吾

破蓮の荒涼とした風景は俳人が好む風景だが、蓮は、仏教的

にもよく登場する日本人の生活に密着したもので、夏に新しい葉を水面に浮かべ、葉はやがて水上に広がる。そして秋風が吹き始めると次第に破れて風に鳴り、索漠とした姿になりやがて冬になれば、葉は枯れて枯蓮になる。吹き破られた蓮の葉にはもはやそよぐ力は無く、作者は蕭条と枯れゆく中に葉の無念さを見つめていた。(以下略)

